

貧血が疑われる時に受ける検査



日本臨床検査医会
土屋 達行

貧血、それは皆さんにとって非常にポピュラーな病名でしょう。若い女性のかたは多かれ少なかれ多少は貧血の傾向があるのではないのでしょうか。ところで自分で貧血ではないかと思う場合は、顔色が青白いことを他の人から指摘されたり、動悸や息切れを感じたり、あるいは急に頭がふらつくような感じがしたり、気持ちが悪くなったりしたときでしょう。このような症状は、体の組織の酸素不足によりおこるものなのです。つまり貧血とは、赤血球中の酸素を運搬する大事な働きをするヘモグロビンと言う物質が減少したためにおこる、組織の酸素不足による症状をあらわしたものの総称です。ですから貧血の有る無しは診察と同時に、検査をしてヘモグロビンの量が減少しているかどうかを見ることが最も大切なのです。このような貧血

の検査として一般的なものは、血液の検査で、赤血球の数、ヘモグロビンの量、赤血球の全部の血液に占める割合を求めたヘマトクリット値が主なものです。この3つの検査のうちヘモグロビン量が最も貧血であるかないかの判断に重要なものです。さて、貧血を治療するためには、貧血を起した原因をはっきりさせるのが最も大切なことです。そのための検査として、血液の検査で貧血があった場合は、赤血球を作るために必要な原料、代表的には鉄、ビタミンB12、葉酸などを直接血液を用いて測定します。貧血の中で最も見られる頻度の高い鉄欠乏性貧血では、体内に貯蔵されている鉄の量を血清のフェリチンを測定することで推定します。貯蔵されている鉄の量が少ない場合、慢性的な出血が原因となっていることが多いので、消化管か

らの出血があるかどうかを内視鏡を用いて、潰瘍や癌などの有無を検査します。女性なら子宮筋腫などによる月経の量が多いことなどを、婦人科的な検査で調べます。血液を作る原料が十分にあるときには、血液を作る工場である骨髄の中を調べる骨髄穿刺検査や、赤血球を作れと指令する腎臓から出るエリスロポエチンというホルモンの検査を、腎臓の検査と同時にに行ないます。

このように貧血の検査とは貧血があるかないかだけでなく、貧血を来した原因を探り、原因を除去することが大切なことがおわかりいただけると思います。したがって貧血があった時には、簡単に原因がわかるもの以外はどうしても行なう検査の種類が多くなり、場合によっては全身の検査を行わなくてはならない場合も多いのです。

